

准教授

石井 美紀代

■ 学歴

1. 2001年 大分医科大学大学院修士課程 修了

■ 学位

1. 修士（看護学）

■ 研究分野

1. 地域・在宅看護学
- 2.
- 3.

■ 研究キーワード

1. 在宅ケア
2. 家族介護
- 3.

■ 研究課題

1. 医療・介護の一体化改革によって、在宅の定義が単に自宅を指すものではなく、「生活の場」に拡大されている。そこで、地域包括ケアにおける看護職の機能や役割について研究する。
- 2.

■ 担当授業科目

1. 社会保障概説（看護学科1年 後期）
2. 家族看護学（看護学科2年 後期）
3. 対象別公衆衛生看護活動論Ⅱ（看護学科2年 後期）
4. 看護研究（看護学科3年 前期）
5. 在宅看護学（看護学科3年 前期）
6. 在宅看護学演習（看護学科3年 前期）
7. 在宅看護学実習（看護学科3年後期・4年前期）
8. 看護総合演習（看護学科4年 通年）
9. 看護総合実習（看護学科4年 通年）
10. 看護学特論（看護学科4年 後期）
11. 保健福祉学入門（保健福祉学部合同 1年前期）
12. 高齢者支援学Ⅰ（保健福祉学部共通科目 2年集中）
【未開講】看護学（栄養学科） 高齢者支援学Ⅱ（保健福祉学部合同）

■ 授業を行う上で工夫した事項

※ 助教・助手については、実習・演習等の指導を行う上で工夫した事項

1.	<p>授業科目名【社会保障概説】</p> <p>本講義は、社会福祉士の外部講師を含み3人で担当しており、単位認定者として調整も行った。</p> <p>学生は中学や高校の「公民」の授業で日本国憲法や社会保障制度を学んできているが、多くは苦手意識を持っている。そのため、社会保障制度の解説と法的根拠の整理だけではなく、患者や地域住民、家族と関連させた事例使って解説し、看護とのつながりを意識して伝えた。また、授業の最後には国家試験の過去問を解いてもらい、資格取得に必要な知識であることを学生に伝えることを心掛けている。さらに、授業終わりには、毎回、質問の時間を確保し、学生の理解に努めた。</p>
2.	<p>授業科目名【家族看護学】</p> <p>本講義は、家族を看護学、心理学、社会学でどう捉えているかを解説することから、単位認定者として社会学を専門とする外部講師の調整も行った。</p> <p>学生の中には、自分の家族に対して複雑な感情をもっている者もいることが想定される。そのため、事前に学生支援室に協力を依頼するとともに、あえて自分の家族を説明したり分析したりさせなかった。また、学生の興味や理解を得るため、アニメの家族（サザエさん、ちびまる子ちゃん、クレヨンしんちゃん）や看護で出会う架空の事例で講義を実施した。</p>
3.	<p>授業科目名【対象別公衆衛生看護活動論】</p> <p>本講義は、看護師課程は選択、保健師課程は必修である。保健師課程を目指す学生と、単位取得のみを目指す学生が混在しており、取り組み意欲に差がある。理論や仕組みの説明後、専門雑誌の記事を資料にして実務展開をpushしていくものの、なかなか学生の興味を引くことができなかった。</p> <p>授業の後半で、各テーマの重要項目を示して復習を促したが、主体的学習に繋がらなかった。</p>
4.	<p>授業科目名【看護研究】</p> <p>本講義は、単位認定者の溝部教授を中心に看護学科教員4人で担当している。講義内容では、研究の流れ・研究デザイン・研究手続・研究倫理・研究計画書についての解説を行う。演習では、論文クリティーク、英語文献の要約、研究計画書の作成・量的研究と質的研究の分析体験・抄録作成と、研究の一連の流れを体験させた。3年前期は各看護学演習が行われることから、学生の負担を考慮し、前年度より個人の提出物を減らし、ディスカッションの時間を増やしてグループでの思考を促した。</p>
5.	<p>授業科目名【在宅看護学】</p> <p>本講義は教員2人で担当しており、単位認定者として調整も行った。在宅看護学は、看護の統合科目に位置づけられることから、授業テーマに合わせて基礎科目や各看護学の知識を想起させつつ、学生には「在宅看護ならではの」を意識するように問いかけた。また、在宅看護にとどまらず、地域包括ケアを意識させること、同時期に開講されている「地域生活支援論」と関連させて理解できるよう配慮した。</p>
6.	<p>授業科目名【在宅看護学演習】</p> <p>本講義は教員2人と助手1人とで担当しており、単位認定者として調整も行った。15回の授業を①在宅看護過程 ②訪問看護の技術提供・教育機能 ③臨床推論 の3つに大別して展開した。在宅看護過程では、共通事例の看護過程を見本として配布・解説し、さらに、熟の事例の看護過程をグループワークと個人ワークで完成させることで、個々人の知識・理解の習得を目指した。また、技術提供は手順書を、教育機能は指導案をグループで見本をもとに事例に合わせて作成し、ロールプレイ</p>

	<p>で発表した。臨床推論は、教員が発熱患者となって学生の質問に答えていき、その内容からグループで発熱の原因を突き止めることを実施した。臨床推論は初めての試みであったが、学生はゲーム感覚で興味をもって学習してくれた。</p>
7.	<p>授業科目名【在宅看護学実習】</p> <p>2023年度の実習は、新型コロナウイルス感染症が5類に移行したとはいえ、制限下での実施に変わりはない。実習施設である訪問看護ステーションに対し、大学の感染予防体制、学生の行動制限や健康観察、教員の指導体制、実習目標と実習項目などを事前に何度も協議し、ご理解をいただいた施設で臨地実習をさせていただいた。</p> <p>学生は、これまで基礎実習が学内のみの実習だったことから、臨地実習に慣れていないため、過緊張となり、楽しんで実習する様子が見られないまま終了することが多かった。また、学生を臨地に行かせたことで、今までになかった失敗やヒヤリハット事案が発生し、実習施設に謝罪に行くことが多かった。しかし、施設側は実習の重要性を理解していただいております、中断させることなく最後まで実習を継続させていただいたことに感謝している。</p>
8.	<p>授業科目名【看護総合演習】</p> <p>本科目は、看護総合実習を挟んで行われる。学生には、これまでの学習や実習で興味があるテーマを選定させた。前半はそのテーマについて文献学習し、毎週ゼミグループにプレゼンテーションし、意見をもらいながら実習計画を作成する。実習後は個別に指導して、その成果や疑問をまとめて論文を作成し、ゼミの論文集を作成した。論文は期日を過ぎたものの、全員が完成させることができた。</p>
9.	<p>授業科目名【看護総合実習】</p> <p>看護総合実習は4年間の学習の総まとめの実習であることから、学生が主体的に行動し学ぶ工夫と仕掛けをしていった。</p> <p>学生の選定したテーマの実習が可能な訪問看護ステーションを個別に選び、学生が主体的に実習するため6名のゼミ生を1名ずつ違う施設に依頼した。その後は、学生が看護総合演習で作成した各自の実習計画をもとに説明し、自ら日程交渉していった。学生に看護総合実習をさせていただいた施設に、論文集をもってお礼に行くことで、終了とした。</p>
10.	<p>授業科目名【看護学特論】</p> <p>本講義は、看護学科教員がオムニバスで講義するもので、私は在宅看護学分野の講義を担当した。4年生後期で、学生はすべての講義・実習をおえており、教授するのではなく在宅医療・在宅看護の国の方針や展望を伝えることを意識した。しかし、学生は看護の将来展望よりも身近な国家試験の方に興味があるため、国家試験につながるトピックスを交えながら講義した。</p>
11.	<p>授業科目名【保健福祉学入門】</p> <p>本講義は、保健福祉学部3学科の教員がオムニバスで講義する。私は、地域包括ケア・在宅看護分野の講義を担当した。1年前期であっても、学生は自己の学科や目指す専門職の特性を追及しようとしている。そのため、『看護・栄養・福祉が活動する“医療・介護”の分野は多くの専門職が存在するが、ボーダレスの活動で人々を支えている』ということ意識して伝えた。</p> <p>今回、学生の中に合理的配慮を要する学生があった。講義の資料、話す速さ、時間等の配慮を行いながら、反応に注意して講義した。</p>
12.	<p>授業科目名【高齢者支援学Ⅰ】</p> <p>本科目は総合人間科学に位置し保健福祉学部の3学科共同で行われる。福祉学科の荒木先生を中心に、到達目標・講義展開・評価基準を統一するための打合せに力を注いだ。</p>

	初日に講義、2日目に3学科合同で事例を使ったグループワークを行う。講義では、各学科のカリキュラムが違うために、高齢者の特性を共通認識させることに特化した。グループワークでは、3学科の学生が自分の得意分野を示そうと作業分担しがちになることから、3学科でディスカッションさせることに注力した。
--	--

■ 学会における活動

	加入時期	所属学会等の名称	役職名等（任期）
1.	1997年6月～（現在に至る）	日本健康福祉政策学会	
2.	1997年10月～（現在に至る）	日本地域看護学会	
3.	1998年4月～（現在に至る）	日本看護学教育学会	
4.	1998年4月～（現在に至る）	日本公衆衛生学会	
5.	1999年4月～（現在に至る）	日本老年社会科学学会	
6.	1999年4月～（現在に至る）	日本学校保健学会	
7.	1999年8月～（現在に至る）	日本老年看護学会	
8.	2001年11月～（現在に至る）	日本看護研究学会	
9.	2004年8月～（現在に至る）	日本在宅ケア学会	

■ 研究業績等に関する事項（2023年度）

	発行又は 発表の年月	著書、学術論 文等の名称	単著・ 共著の別	発行所、発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
（著書）					
1.	なし				
（学術論文）					
1.	なし				
（翻訳）					
1.	なし				
（学会発表）					
1.	なし				

■ 外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）

（1） 共同研究				
	研究題目	交付団体	研究者 ○代表者（）内は学外 者	交付決定額 （単位：円）
1.	なし			

（2） 個人研究				
	研究題目	交付団体	交付決定額	備考

			(単位：円)	
1.	なし			

■ 社会における活動

	任 期 期 間 等	団体・委員会等の名称 (内 容)	役 職 名 等
1.	2020年4月～現在に至る	戸畑区地域ケア研究会	運営委員
2.	2021年4月～現在に至る	福岡県看護協会看護研究倫理審査委員会	委員
3.	2022年11月～現在に至る	北九州市開発審査会	委員

■ 学内における活動等（役職、委員、学生支援など）

	任 期 期 間 等	会議・委員会等の名称 (内 容)	役 職 名 等
1.	2023年4月～2024年3月	(学科) 学生募集委員	サブ委員
2.	2023年4月～2024年3月	(学科) 共用試験導入対策	委員
3.	2023年4月～2024年3月	(学科) 2年・4年アドバイザー	アドバイザー